

# 捨兒

芥川龍之介

青空文庫



「浅草の永住町に、信行寺と云う寺がありますが、——いえ、大きな寺じやありません。ただ日朗上人の御木像があるとか云う、相應に由緒のある寺だそうです。その寺の門前に、明治二十二年の秋、男の子が一人捨ててありました。それがまた生れ年は勿論、名前を書いた紙もついていない。——何でも古い黄八丈の一つ身にくるんだま、緒の切れた女の草履を枕に、捨ててあつたと云う事です。

「当時信行寺の住職は、田村日錚と云う老人でしたが、ちようど朝の御勤めをしていると、これも好い年をした門番が、捨児のあつた事を知らせに來たそうです。すると仏前に向つていた和尚は、ほとんど門番の方も振り返らずに、「そうか。ではこちらへ抱いて來るが好い。」と、さも事もなげに答えました。のみならず門番が、怖わ怖わその子を抱いて來ると、すぐに自分が受け取りながら、「おお、これは可愛い子だ。泣くな。泣くな。今日からおれが養つてやるわ。」と、気軽そうにあやし始めるのです。——この時の事は後になつても、和尚鼻屑の門番が、櫛や線香を売る片手間に、よく參詣人へ話しました。御承知かも知れませんが、日錚和尚と云う人は、もと深川の左官だったのが、十九の年に足場から落ちて、一時正氣を失つた後、急に菩提心を起したとか云う、でんぼ

う肌の畸人きじんだったのです。

「それから和尚はこの捨児に、勇之助ゆうのすけと云う名をつけて、わが子のように育て始めました。が、何しろ御維新ごいしん以来、女氣おんなげのない寺ですから、育てると云ったにした所が、容易な事じゃありません。守りもをするのから牛乳の世話まで、和尚自身が看経かんきんの暇には、面倒を見ると云う始末なのです。何でも一度などは勇之助が、風か何か引いていた時、折悪く河岸の西辰にししたつと云う大檀家おおだんかの法事があったそうですが、日錚和尚は法衣ころもの胸に、熱の高い子供を抱だいたまま、水晶すいしょうの念珠ねんじゆを片手にかけて、いつもの通り平然と、読経どきようをすませたと云う事でした。

「しかしその間まも出来る事なら、生みの親に会わせてやりたいと云うのが、豪傑ごうけつじみていても情じように脆もろい日錚和尚の腹だったのでしょう。和尚は説教の座へ登る事があると、——今でも行つて御覧になれば、信行寺の前の柱には「説教、毎月十六日」と云う、古い札ふだが下さがつていますが、——時々和漢の故事を引いて、親子の恩愛を忘れぬ事が、即ち仏恩をも報ゆえんずる所以ゆえんだ、と懇ねんごろに話して聞かせたそうです。が、説教日は度々めぐつて来ても、誰一人進んで捨児の親だと名乗つて出るものは見当りません。——いや勇之助が三歳の時、たった一遍、親だと云う白粉おしろい焼いけのした女が、尋ねて来た事がありました。しかしこれは

捨児を種に、悪事でもたくらむつもりだったのでしよう。よくよく問い質して見ると、疑わしい事ばかりでしたから、癩癬の強い日錚和尚は、ほとんど腕力を振わないばかりに、さんざん毒舌を加えた揚句、即座に追い払ってしまいました。

「すると明治二十七年の冬、世間は日清戦争の噂に湧き返っている時でしたが、やはり十六日の説教日に、和尚が庫裡から帰つて来ると、品の好い三十四五の女が、しとやかに後を追つて来ました。庫裡には釜をかけた囲炉裡の側に、勇之助が蜜柑を剥いている。——その姿を一目見るが早いか、女は何の取付きもなく、和尚の前へ手をつけて、震える声を抑えながら、「私はこの子の母親でございしますが、」と、思い切つたように云つたそうです。これにはさすがの日錚和尚も、しばらくは呆氣にとられたまま、挨拶の言葉さえ出ませんでした。が、女は和尚に頓着なく、じつと畳を見つめながら、ほとんど暗誦でもしているように——と云つて心の激動は、体中に露われているのですが——今日までの養育の礼を一々叮嚀に述べ出すのです。

「それがややしばらく続いた後、和尚は朱骨の中啓を挙げて、女の言葉を遮りながら、まずこの子を捨てた訳を話して聞かすように促しました。すると女は不相変畳へ眼を落したまま、こう云う話を始めたそうです——

「ちようど今から五年以前、女の夫は浅草田原町あさくさたわらまちに米屋の店を開いていましたが、株に手を出したばつかりに、とうとう家産を蕩尽とうじんして、夜逃げ同様横浜よこはまへ落ちて行く事になりました。が、こうなると足手まといなのは、生まれたばかりの男の子です。しかも生憎いたにく女には乳がまるでなかったものですから、いよいよ東京を立ち退のこうと云う晩、夫婦は信行寺の門前へ、泣く泣くその赤子を捨てて行きました。

「それからわずかの知るべを便りに、汽車にも乗らず横浜へ行くと、夫はある運送屋へ奉公をし、女はある糸屋の下女になつて、二年ばかり二人とも一生懸命に働いたそうです。その内に運が向いて来たのか、三年目の夏には運送屋の主人が、夫の正直に働くのを見こんで、その頃ようやくよく開け出した本牧辺ほんもくへんの表通りへ、小さな支店を出させてくれました。同時に女も奉公をやめて、夫と一しよになつた事は元より云うまでもありますまい。

「支店は相当に繁昌はんじやうしました。その上また年が変ると、今度も丈夫そうな男の子が、夫婦の間あいだに生まれました。勿論悲惨な捨子の記憶は、この間も夫婦の心の底に、蟠わだかまつていたのに違いありません。殊に女は赤子の口へ乏しい乳を注ぐ度に、必ず東京を立ち退のいた晩がはつきりと思ひ出されたそうです。しかし店は忙いそがしい。子供も日に増し大きくなる。銀行にも多少は預金が出来た。——と云うような始末でしたから、ともかくも夫婦は久し

ぶりに、幸福な家庭の生活を送る事だけは出来たのです。

「が、そう云う幸運が続いたのも、長い間の事じやありません。やっと笑う事もあるようになったと思うと、二十七年の春そうそう々、夫はチブスに罹かかつたなり、一週間とは床とこにつかず、ころりと死んでしまいました。それだけならばまだ女も、諦あきらめようがあつたのでしようが、どうしても思い切れない事には、せつかく生まれた子供までが、夫の百ひゃつヶ日にちも明けない内に、突然疫えき癘りで歿なつた事です。女はその当座昼も夜も氣違ちがいのように泣き続けました。いや、当座ばかりじやありません。それ以来かれこれ半はん年としばかりは、ほとんど放心同様な月日さえ送らなければならなかつたのです。

「その悲しみが薄らいだ時、まず女の心に浮んだのは、捨てた長男に会う事です。「もしあの子が達者だつたら、どんなに苦しい事があつても、手もとへ引き取つて養育したい。」——そう思うと矢も楯たてもたまらないような氣がしたのでしよう。女はすぐさま汽車に乗つて、懐しい東京へ着くが早いか、懐しい信行寺しんぎようじの門前へやつて来ました。それがまたちようど十六日の説教日の午前だつたのです。

「女は早速庫裡くりへ行つて、誰かに子供の消しょう息そくを尋ねたいと思ひました。しかし説教がすまない内は、勿論和尚にも会われますまい。そこで女はいら立たしいながらも、本堂一

ばいにつめかけた大勢の善男善女に交つて、日錚和尚の説教に上の空の耳を貸していました。——と云うよりも實際は、その説教が終るのを待っていたのに過ぎないのです。

「所が和尚はその日もまた、蓮華夫人が五百人の子とめぐり遇つた話を引いて、親子の恩愛が尊い事を親切に説いて聞かせました。蓮華夫人が五百の卵を生む。その卵が川に流されて、隣国の王に育てられる。卵から生れた五百人の力士は、母とも知らない蓮華夫人の城を攻めに向つて来る。蓮華夫人はそれを聞くと、城の上の楼に登つて、「私はお前たち五百人の母だ。その証拠はここにある。」と云う。そうして乳を出しながら、美しい手に絞つて見せる。乳は五百条の泉のように、高い楼上の夫人の胸から、五百人の力士の口へ一人も洩れず注がれる。——そう云う天竺の寓意譚は、聞くともなく説教を聞いていた、この不幸な女の心に異常な感動を与えました。だからこそ女は説教がすむと、眼に涙をためたまま、廊下伝いに本堂から、すぐに庫裡へ急いで来たのです。

「委細を聞き終つた日錚和尚は、囲炉裡の側にいた勇之助を招いで、顔も知らない母親に五年ぶりの対面をさせました。女の言葉が嘘でない事は、自然と和尚にもわかつたのでしよう。女が勇之助を抱き上げて、しばらく泣き声を堪えていた時には、豪放濶達な



和尚の眼にも、いつか微笑を伴った涙が、睫毛の下に輝いていました。

「その後の事は云わずとも、大抵御察しがつくでしょう。勇之助は母親につれられて、横浜の家へ帰りました。女は夫や子供の死後、情深い運送屋主人夫婦の勧め通り、達者な針仕事を人に教えて、つつましいながらも苦しくない生計を立てていたのです。」

客は長い話を終ると、膝の前の茶碗をとり上げた。が、それに唇は当てず、私の顔へ眼をやつて、静にこうつけ加えた。

「その捨児が私です。」

私は黙つて頷きながら、湯ざましの湯を急須に注いだ。この可憐な捨児の話が、客松原勇之助君の幼年時代の身の上話だと云う事は、初対面の私にもとうに推測がついていたのであつた。

しばらく沈黙が続いた後、私は客に言葉をかけた。

「阿母さんは今でも丈夫ですか。」

すると意外な答があつた。

「いえ、一昨年歿くなりました。——しかし今御話した女は、私の母じゃなかったのです。」

客は私の驚きを見ると、眼だけにちらりと微笑を浮べた。

「夫が、あざくさたわらまち浅草田原町に米屋を出していたと云う事や、横浜へ行つて苦労したと云う事は勿論嘘うそじゃありません。が、捨児をしたと云う事は、嘘だった事が後に知れました。ちょうど母が歿なくなる前年、店の商用を抱えた私は、——御承知の通り私の店は綿糸の方をやつていきますから、新にい潟がた界かい隈いを廻つて歩きましたが、その時田原町の母の家の隣に住んでいた袋物屋ふくろものやと、一つ汽車に乗り合せたのです。それが問わず語りに話した所では、母は当時女の子を生んで、その子がまた店をしまう前に、死んでしまったとか云う事でした。それから横浜へ帰つて後、早速母に知れないように戸籍謄本をとつて見ると、なるほど袋物屋の言葉通り、田原町にいた時に生まれたのは、女の子に違いありません。しかも生後三月目みつぎめに死んでしまつていますのです。母はどう云う量りょう見けんか、子でもない私を養うために、捨児の嘘をついたのです。そうしてその後二十年あまりは、ほとんど寝食さえ忘れるくらい、私に尽してくれたのです。

「どう云う量見か、——それは私も今日こんにちまでには、何度考えて見たかわかりません。が、事實は知れないまでも、一番もつともらしく思われる理由は、日鐸和尚の説教が、夫や子に遅れた母の心へ異常な感動を与えた事です。母はその説教を聞いている内に、私の知ら

ない母の役を勤める気になったのじやありませんまいか。私が寺に拾われている事は、当時説教を聞きに来ていた参詣人からでも教わったのでしよう。あるいは寺の門番が、話して聞かせたかも知れません。」

客はちよいと口を嚙むと、考え深そうな眼をしながら、思い出したように茶を啜つた。

「そうしてあなたが子でないと云う事は、——子でない事を知ったと云う事は、阿母さんにも話したのですか。」

私は尋ねずにはいられなかった。

「いえ、それは話しません。私の方から云い出すのは、余り母に残酷ですから。母も死ぬまでその事は一言も私に話しませんでした。やはり話す事は私にも、残酷だと思つていたのでしよう。實際私の母に対する情も、子でない事を知った後、一転化を来したのは事実です。」

「と云うのはどう云う意味ですか。」

私はじつと客の目を見た。

「前よりも一層なつかしく思うようになったのです。その秘密を知って以来、母は捨児の私には、母以上の人間になりましたから。」

客はしんみりと返事をした。あたかも彼自身子以上の人間だった事も知らないように。

(大正九年七月)

# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「新潮」

1920（大正9）年7月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2012年3月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 捨児

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>